

梅若七兵衛

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂・編纂

青空文庫

引続きまして、梅若七兵衛うめわかしちべえと申す古いお話を一席申上げます。え、此の梅若七兵衛という人は、能役者の内狂言師でございまして、芝新銭座しばしんせんざに居りました。能の方は稽古のむずかしいもので、尤も狂言の方でも釣つりぎつね狐なつねなどと申すと、三日も前から腰をかぐめている稽古をして居ませんければ、その当日に狂言が出来んという。それでも勤めますと後あと二三日は身体が利かんくらいだという、余程稽古のむずかしいものと見えます。許し物と云つて、其の中に口伝物くでんものが数々ございます。以前は名人が多かったものでございます。観世善九郎かんぜぜんくろうという人が鼓を打ちますと、台所の銅壺どうこの蓋がかたりと持上り、或は屋根の瓦がばら／＼と落ちたという、それが為瓦胴がぼうという銘が下りたという事を申しませんが、この七兵衛という人は至つて無慾な人でございます。只宅うちにばかり居まして伎わざの事のみを考へて居りますから貯えとてもありません。お大名から呼びに来ても往ゆきません。鼻眞のお屋敷から迎むかいを受けても参りません。其の癖随分贅沢を致しますから段々貧ひんに迫りますので、御新造ごしんぞが心配をいたします。なれども当人は平気で、口の内で謡うたいをうたい、或はふいと床から起上つて足踏をいたして、ぐるりと廻つて、戸棚の前へびたりと坐つたり何か変なことをいたし、まるで狂きちがい人びじみて居ります。ちようど歳暮くれのことで、

内儀「旦那え〜」

七「え〜」

内儀「貴方には困りますね」

七「何ぞというとお前は困るとお云いだが何が困ります」

内儀「何が困るたって、あなた此様に貧乏になりきりまして、実に世間体も恥かしい事で、斯様な裏長屋へ入って、あなたは平気でいらつしやるけれども、明日食えますお米を買って炊くことが出来ませんよ」

七「出来ないって、何うも仕方がない、お米が天から授からないので」

内儀「そんな事を云っていらしつては困ります、何処へでも忠実にお歩きあそばせば、御鼻頂のお方もいかいこと有りまして来い〜と仰しやるのにお出でにもならず、実に困ります、殊に日外中度々、お手紙をよこして下すつた番町の石川様にもお気の毒様で、食べるお米が無くつても、あなたは心柄で宜しゅうございましょうが、私は実に困ります」

七「困つたつて、私は人の家へ往つてお辞儀をするのは嫌いだもの、高貴の人の前で口をきくのが厭だ、気が詰つて厭な事だ、お大名方の御前へ出ると盃を下すつたり、我儘な変なことを云うから其れが厭で、私は宅に引込んで、何処へも往かない、それで悪ければ仕

様がない」

内儀「仕様がないたつて、あなた何へいらつしやいましよ、あの石川様へお歳暮だつて入らつしやると、いつでも貴方に千足ぐらい御祝儀を下さるじやアありませんか」

七「他人ひとのものを当あてにしちやアいかん、他人のものを当にして物を貰うという心が一体いっぴ賤いやしいじやアないか」

内儀「賤しいたつて貴方、お米を貰うことが出来ませんよ、今日も米こめ櫃びつを扨たつて、お粥かゆにして上げましたので」

七「それはく苦々しいことで」

内儀「そんな事を仰しやらずに往つて入らつしやいまし」

七「じやア往いこう、だが当にしなさんな」

内儀「あなた、そのお服装みなりじやアいけません、これを召していらつしやい」

七「なに、これで沢山だ、悪いと云えば帰つて来る」

と無慾の人だから少しも構いませんで、番町の石川という御旗下やしぎの邸ゆへ往くと、お客来で、七兵衛は常々御鼻屣かぶだから、

殿「直すぐにこれへ……金田氏貴公も予かて此の七兵衛は御存じだろう、不断はまるで馬鹿だね、

始終心の中で何か考えて居つて、何を問ひ掛けてもあいぐと答をする、それが来たので、妙な男で、あゝ来た来た、妙な物を着て来たなア、何だハ、袖無し羽織見たような物を着て来たな、七兵衛構わずこれへ」

七「へえ」

殿「誠に久しく会わんのう」

七「へえ」

殿「再度書面を遣つたに出て来んのは何ういうわけか」

七「へえ」

殿「他へでも往つたか」

七「へえ」

殿「煩いでもしたか」

七「へえ」

殿「然うでもないようだな」

七「へえ」

殿「何だかそれじゃア分らん、迎いをやつても来てくれんから恨んでいた。今日は宜く出

て来たの」

七「へえ」

殿「続いて寒いから雪催しで有るの」

七「へえ」

殿「何だえ……御覧なさい、あの通りで……これ誰か七兵衛に浪々酌をしてやれ、膳を早く……まあ、これへ……え、此の御方は下谷の金田様だ、存じているか、これから御鼻屑になつてお屋敷へ出んければ成らん」

金田「予て噂には聞いていたが未だしみ／＼会わん、下谷辺へ来るような事があつたら、身が屋敷へも寄つておくれ」

七「へえ……彼方へは往きません、面倒だから何処も往きません」

殿「何かぐず／＼口の内で言っているな、浪々酌をしてやれ、もう一杯やれ」

七「へえ、お酒なら否とは云いません」

殿「其の方が久しく参らん内に私は役替を仰せ付けられて、上より黄金を二枚拝領した、何うだ床間にある、悦んでくれ」

七「へえ」

と張合のない男で、お役替だと云えば御恐悦でございますとか、お目出度いぐらいの事は我々でも陳のべますが、七兵衛は面倒だというので、只へえへえという、誠に張合抜がいたします。

殿「何うだ見せようか」

七「見たって仕様が有りません」

殿「なれども上から拝領するは容易ならんことだよ」

七「へえ……大きなもんですな、これは幾許いくらぐらいのもんですな」

殿「それは何んだの相場によつて違うが、大抵二十五両ぐらいの通用のものである」

七「へえ一枚二十五両ツ……これが一枚あれば家内にぐず／＼いわれる訳はないが、二枚並んで、も他人ひとの宝を見たつて仕方がないな」

殿「何をぐず／＼いつて居おる、別に欲しくはないか、一枚やろうかな」

七「へ、へ、へ、嘘ばっかり」

殿「なに嘘をいうものか、一枚やろう」

と御酒機嫌とは云いながら余程御鼻屑と見えまして、黄金を一枚出された時に、七兵衛は正直な人ゆえ、これを貰さえば嘸さ家内さが悦ぶだろうと思ひ、押戴いて懐へ突つ込んで玄関

へ飛出しました。

殿「あれ／＼七兵衛が何処かへ往くぞ、誰か見てやれ」

七兵衛は委細構わずどツと、駈けてまいると、ちら／＼雪が降り出してまいりました。どツと、番町今井谷を下りまして、虎ノ門を出にかゝるとお刺身にお吸物を三杯食つたので胸がむかついて耐りませんから、堀浚いの泥に積っている雪の上へ吐しました。十分嘔いて胸が癒つたからせつせと新銭座の宅へ帰つてまいりましたので、女房は恟りいたしました。

内儀「おや大層お早く、たま／＼いらつしやいましたから今晚はお遅かろうと思いましたが、石川様は御機嫌宜しゆうございましたか」

七「はい、お役替で」

内儀「お役替、お／＼それはお目出度いところへ入らつしやいました」

七「どうもね、その、お役替で」

内儀「何うなすつたの」

七「む／＼……じゃ」

内儀「懐を捜していらつしやいますが、何うかお落し物ですか」

七「え……これは無い、これは無い」

内儀「何うなすったの」

七「何うしたつて（金を受取り押戴き懐へ入れる真似をして考えている）」

内儀「あなた何をなすつて入らつしやいます」

七「お屋敷を駈出して、虎ノ門の堀端で屈こむんだ時に懐からすべったに違いない……ちよいと往つて来るよ」

とまた駈出しました。

内儀「傘も差さずに貴方何処へいらつしやいます」

七兵衛はどん／＼駈けてまいり、こゝらで嘔くいたろう、と思いましたが、堀ほり浚さらいの泥が山盛りになつて居ります所を捜すと宜よい塩あんばい梅ばいに有りましたから、

七「あゝ有難い」

と押戴き、幸い雪で人も通らず、懐へ入れてせつせと帰つてまいり、

七「往つて来たよ」

内儀「あらまア貴方何うなすったの、笠も被らないで、そゝつかしいお方じゃありませんか、あなたは石川様で黄金を御拝領なすったの」

七「え……何うしてお前それを知ってるえ」

内儀「何うしたつて貴方が、顔色を変えて懐を捜しながらお駈出しなすつたので、落し物に違いないと思ひまして出て見ますと、路地に小さい紙入いに宜い金物が打つたのが落ちてましたから開けて見ますと黄金が入っていました、何でもこれは石川様に頂戴したに違ひないと思ひ、余り嬉しうございますから神棚へ上げて置きましたところへ、宜い塩梅に酒屋の御用が通りかゝりましたから申付けて御酒おみきを上げてあります、何にも包まずにお置きなざるから落ちるんで、本当に貴方は何ぼ何だつてお金を粗末に遊ばすと罰ばちが中あたりますよ」

七「嘘をお吐つき、黄金はこゝにちやんと有るんだよ」

内儀「有るたつて此処にもございますもの、御覧遊ばせ此の通り……」

七「おやくこゝにも一枚……一枚の黄金が二枚になつたか知ら、これは驚いた、黄金が子を生みやアしめえ。(ポンと手を拍うち)あ分つた、二枚拝領したんだ、しかし一枚やろうと仰しやつて二枚出したのを嬉しまぎれに奪ひったく取つて二枚一緒に持つて来たに違ひない、これは濟まん、直すぐに往つて返して来る」

と云いすて、せつせと石川様へ来て見ると、お客様がお歸りになつた後あとで。

殿「何だえ七兵衛、雪だらけになつて何うしたんだ」

七兵衛はせえく息を切り、

七「ハア一水ツ一杯……」

殿「これ誰か七兵衛に何かやんな、せえく」と云っているから……今日は変だな、だまつて駈出してしまつて、まだ種々話もあつたに、何うしたえ」

七「殿様、誠にお恥かしい事でございますが、手前は何処からお招きがございましたも面倒だから何処へもまいりません、あなた方の我儘を聞くのが厭だから滅多に出ません、ところが今、日家内が米がない、米櫃を払つてお粥を炊いた、これではいかんから石川様へいらつしやれば、屹度お歳暮を下さると云いましたので参りました」

殿「そう思つて来てくれ、ば嬉しいじやアないか」

七「ところが黄金を下さいましたろう、貴方が」

殿「左様」

七「私は余り嬉しいから二枚一緒に奪取りましたものか、一枚遣ろうと仰しやつたのは慥かに覚えて居ります、それを懐に入れてせつせと駈けて行くと、胸がむかゝいたしますから虎ノ門の傍で反吐を吐きました」

殿「汚ないのう」

七「それから宅へ歸つて懐を捜すと無い、定めてこれは反吐の中へ落したんだろうと思ひまして、虎ノ門へ取返して、反吐の中を搔廻すと有りましたから悦んで宅へ歸ると、家内の申すには、溝板の上へ黄金が落ちてたと申しましたが、大方御前のお出しになった時、二枚奪取つてまいつたに違いありませんから、これはお返し申して一枚頂戴……」

殿「いや其の方には一枚しか遣りやアしない……これに一枚ある」

七「へえ……こゝに二枚あります」

殿「一枚剥がして其方へ遣つたんだよ、これに一枚あるだろう」

七「へえ……黄金はだん／＼殖るかね、妙な事もあるもんですな」

殿「貴様の拾つたのは」

七「堀浚いの土の盛つてあるに吐いた反吐を搔廻して捜し出しましたから、再び返しに

まいりましたので」

殿「どれ、見せろ」

と手に取上げてつく／＼見られ、

殿「これは泥の中へ埋つていたものだ、金色が違っている、書いた文字が摺れて分らんよ
うになつて居る、大方これは堀浚いの泥と一緒に出ていたを、其の方がだん／＼搔廻し

たので泥の中から出たんで、全く天から其の方に授かったところの宝で、え 図らず獲たんだの」

七「へえ……それは飛んだ事をしました、彼あすこ 処へ往つて置いて来ましようか」

殿「いや其の方の手許に置いて宜かろう、授かり物じゃ」

と早々石川様から御家来をもちまして、書面に認め、此の段町奉行所へ訴えました。正直の首こっぺに神宿たとえるとの譬で、七兵衛は図らず泥の中から一枚の黄金を獲ましたというお目出度いお話でございます。

(拋酒井昇造速記)

青空文庫情報

底本：「圓朝全集 卷の三」近代文芸・資料複製叢書、世界文庫

1963（昭和38）年8月10日発行

底本の親本：「圓朝全集 卷の三」春陽堂

1927（昭和2）年1月28日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号は原則としてそのまま用いました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼《あ》の」と「彼《あの》」は、それぞれ「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていますが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

※底本中「七兵衛」と「七兵衛」が混在しますが、「七兵衛」に統一しました。

※「／＼」の誤用と思われる箇所もありますが、底本通りとしました。

入力：小林繁雄

校正：門田裕志

2003年11月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

梅若七兵衛

三遊亭圓朝

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂・編纂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>